

第3回 神門通り線2工区ワークショップのご案内

テーマ
(議題)

宇迦橋の景観について考える②

デザイン案の
提示

複数のデザイン案をもとに、宇迦橋やその周辺にふさわしい具体的な景観デザインについて話し合います。

日時 7月27日(木) 19:00～

場所 出雲商工会 3階大会議室
〒699-0711 出雲市大社町杵築南1344

申込
不要

たくさんのご参加を
お待ちしております！



お問い合わせ
島根県出雲県土整備事務所都市整備課
☎ 0853-30-5667 (担当:秋月)

高欄の参考事例

意見交換では、景観アドバイザーの南雲氏から他地域の高欄の参考事例について紹介がありました。第3回ワークショップでは、意見交換の内容を踏まえ、大鳥居や周辺との調和を加味したデザイン案について提示します。

1 木高欄の例：京都 三条大橋



コンクリートでできた橋だが、高欄は木を使用。木は美しいが、時間が経つと痛みが目立ち定期的な補修が必要となる。

手すりの上部に地元の木を使用。年に1度住民によって磨かれている。

2 高欄の一部に木材を使用した例：延岡市 上崎橋



3 石高欄の例：新潟 萬代橋



白い御影石を使用。石と石の間は川が見えるように細かい材料を使用している。

地元の来待石と鉄骨を使用。橋の脇には電線管等を通す桁隠しがつく。



4 来待石+鉄骨高欄の例：松江 米子橋

出雲県土整備事務所 都市整備課 からのメッセージ

橋梁などの土木構造物はそれが担っている機能からも長きにわたり供用される施設です。大正3年、初代は木橋であった宇迦橋から神門通りの歴史は始まりました。そして現在のコンクリート製の宇迦橋が架橋されたのが昭和12年。それから80年を経て今、架け替えのタイミングを迎えています。次の架け替えがいつになるかは分かりませんが、確実に後世に引き継がれることとなります。後の世代が「当時の人々」=「我々」を思ってその意志を継いでもらえるような「かけ橋」にするためにも、もっと地元の方々の声をお聞かせください。次回もご参加よろしくお願いたします。(秋)



島根県出雲県土整備事務所 都市整備課 〒693-8511 島根県出雲市大津町1139 TEL:0853-30-5667 FAX:0853-30-5675

ニュースレター

3号

平成29年6月20日

神門通り線2工区ワークショップ

第2回

ワークショップ開催

宇迦橋の景観について考える①

デザイン
コンセプト

平成29年5月24日(水)に第2回ワークショップを開催し、約60名の方にご参加いただきました。意見交換では、橋を浮かび上がらせる照明としたいといった意見や、大鳥居との調和が必要といった意見などが出され、永く愛される宇迦橋にするにはどうしたらよいか議論が交わされました。

1	2	3	4	5
第1回 ワークショップの 振り返り	宇迦橋の歴史	宇迦橋の デザインコンセプトと 景観検討部会の検討状況	「どんな 宇迦橋にしたいか」 意見交換	まとめ
出雲県土整備事務所	出雲県土整備事務所	総合コーディネーター桑子氏 景観アドバイザー小野寺氏		



景観検討部会の検討状況

景観アドバイザー小野寺氏より説明

【宇迦橋の舗装は石畳を検討】

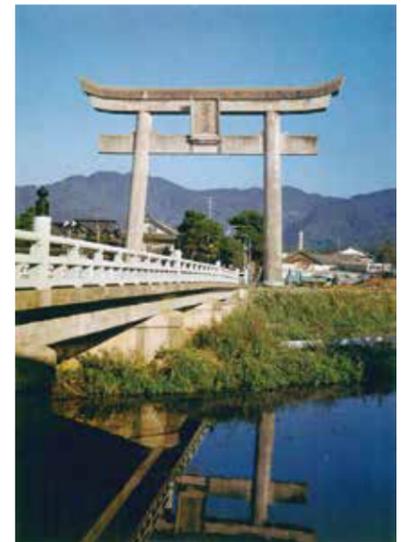
出雲大社の参道から直線になるようにあえて川に対して斜めに架けられた宇迦橋までは、1工区の石畳を延ばすことを検討する。

【宇迦橋より南側は神門通りへの連続性を考慮した演出】

宇迦橋南詰から吉兆館前の交差点は、神門通りへのアプローチとして考え、石畳の整備はしないが、多少の期待感を持たせるデザインを検討する。

【橋の形】

- 橋の途中に張り出し(バルコニー)を付けると西洋風の橋になってしまう。「和のデザイン」として、橋の長さが短く、斜めに架けられた宇迦橋にバルコニーを設けることは望ましくない。
- そもそもバルコニーを出す橋は、外に出て川や周辺の景観を眺めたい場合に付けるが、宇迦橋では、川よりも大鳥居と橋を含めた景観を眺めたい人が多い。
- 宇迦橋は、周りから眺めて写真を撮りたくなる橋にするためシンプルな形状とする。



昭和12年、現在の宇迦橋(コンクリート橋)が完成した。(写真は昭和40年代以前のもの)

資料提供：大社支所

祈りと出会いの道へ。 出雲の国のかけ橋、新しい宇迦橋をわたる。

総合コーディネーター桑子氏より宇迦橋のデザインコンセプト案が紹介されました。

神門通りから参道へ向かってゆく「わくわく感」が最初の表現で、出雲の国に来たのだ、これから大社参拝だ、という地理的、風土的な空間と聖なる空間への結界を「出雲の国のかけ橋」で表現しています。また、「新しい宇迦橋」とすることで、橋を渡る人々にこの橋の名前や、橋の架け替えという事業を知ってもらい、新鮮な感動をもってもらおうとしています。



総合コーディネーター 桑子氏
(一社)CCS代表理事

- 結界である川(橋)を「渡る」
- 空間を「渡る」
- 日常から非日常へ「渡る」
- 現在から古代への時間軸を「渡る」
- 祈りの道がここから始まる



どんな宇迦橋にしたいか意見交換



照明 橋と大鳥居を引き立てる照明に

参加者 よその方が来られた時に、最初に橋の印象があると思う。夜の時間帯も来られるのだったら橋を象徴的に浮かび上がらせて、ここは出雲大社の入口だとアピールしてほしい。

参加者 神門通りの照明は暖色で暖かみがあったので、あのような感じがいいと思った。

南 雲 照明の色、橋のライトアップなどは、渡っているときの精神性のようなものが大事になると思う。また、橋を外からライトアップする場合、橋を眺められる場所も必要ではないかと思う。そういう場所ができるなら、橋脚の見せ方も大事になってくる。安全性と見た目の美しさの両方があると思うので、そこは整理していこうと思う。宇迦橋自体を綺麗に見えるようにして、そこに形のある照明は出てこない方がいい。もちろん橋を照らす明かりや歩道を明るくする明かりなど、演出する明かりも必要だが、橋と大鳥居があるのであまり照明の形が目立ちすぎない方がいい。



景観アドバイザー 南雲氏
(ナグデザイン事務所)



擬宝珠 シンボルとしての擬宝珠

桑子 「擬宝珠を引き続き設置してほしい。できれば数が減らないようにしてほしい」「擬宝珠の中に橋を建てたときのお札かなにかを入れて、人々の注目を浴びるようにする」とあるがどうか？

参加者 伊勢神宮では、宇治橋の擬宝珠に橋を架け替えられた時の札か何かが入っているようで、その擬宝珠だけ皆が触ってテカテカに光っている。そういうものが出雲大社もあれば、注目を浴びるのではないかと思った。

桑子 宇迦橋を渡るときにちょっと触るとご利益があって、わくわく感が演出されるのはいいかもしれない。擬宝珠の数もデザインに関係する。

南 雲 擬宝珠は仏教では大切な形なので、そんなに形を変えるようなものではない。材料も本物の素材を使って、擬宝珠としての美しい形の方がいいと思う。数については、バリアフリー上、高欄を手すりのように手をつたっていく方もおられるので、擬宝珠はシンボルとして残し、あとはできるだけフラットに手すりをつなげた方がいいという議論もある。



高欄 大鳥居との調和がポイント

桑子 高欄の素材は、「御影石がいい」「木などの自然素材がいい」「コンクリート(白色)がいい」「コンクリート以外がいい」といった意見があがっている。

参加者 コンクリートは、大鳥居との調和が取れていると思う。

参加者 大鳥居のイメージを大切に、昭和の雰囲気のある橋にしてほしい。

桑子 大鳥居との調和をどうするのかは大事なポイントである。神門通りとの親和性も大事という意見もある。

参加者 大鳥居は大社のご本殿に遠慮して少し低くつくられていることもある。橋も「大鳥居に負けないけど勝たないデザイン」が大事だと思う。

桑子 橋を渡り、神門通りを通って徐々に大社に近づいているという実感が湧く、その最初の一步が宇迦橋である。宇迦橋、大鳥居、神門通り、そして大社の本参道と歩みを進めて、最後に大社本殿の壮大さに感動する。そういう体験の流れのなかに宇迦橋を位置づけることが大事だと思う。

整備後のイメージスケッチ



小野寺 現在は、大鳥居を南から見た時に高欄が鳥居のやや内側に入っているが、今回、橋を架け替えると幅員が広くなり鳥居が足元から見えるかたちになる。大鳥居と高欄の主従関係的な話は、高欄を考えるポイントになると思う。



コンセプト 永く愛される橋に／橋にインパクトをおきすぎない

桑子 「時代に影響されない、永く愛される橋にしたい」という意見がある。これは1工区の時にも出た意見である。

小野寺 宇迦橋は幅員が変わり、また高欄の高さも転落防止のために変える必要があるなど、今とは違う形にある程度自動的になるであろう。こうした中でやはり考えていきたいのは、ここから新しい歴史をつくるのだと、そんなメッセージがいていいのではないかと思う。これから100年、200年愛され続けて、使われ続けていくデザインを考えていくというのが、今我々に与えられているテーマである。今、産まれていない子どもたちや後世のためにも、デザインしていくような場所なのだと思っている。



景観アドバイザー 小野寺氏
(小野寺康都市設計事務所)

橋本 今回一番大事なキーワードは「違和感」であり、違和感をどうやって創出させるかである。要するに「ここからなんだか違うぞ」という雰囲気はどうやって出すのか。まず、吉兆館の交差点から入り直線区間に入ると一つの変化がある。そして橋があり、インパクトのある大鳥居がある。これだけの変化があり、さらに橋も石置に変えていこうという提案で、色々なところに違和感を散りばめている。そういう意味では新しい世界に入るといふ演出は間違いなく成功するだろう。一方、違和感があまりにも多すぎると今度は忙しくなってくる。ここでは大鳥居があるので、橋にあまりにも強いインパクトをおきすぎない方がいいのではないかと思う。インパクトが強すぎるとドライバーはそっちを見てしまう。いろんな違和感を連続して与えるかたちになっているので、その点もデザインのところで考えてほしい。



交通アドバイザー 橋本氏
(岡山大学大学院准教授)